

「貧窮問答歌」のいわゆる「左注」に関する一考察

池田一彦

私は、本来が明治文学の研究にたずさわる者で、「万葉集」の研究を専門とする者ではない。したがつて、以下にまつたく見当はずれのことを書き連ねる恐れ無しとしないが、多年にわたり山上憶良の「貧窮問答歌」とその「左注」と称されるものに対し抱き続けて来た、ある素朴な疑問——と言うか、自分なりの見解を記し留め置くこととする。

房前、多治比県守、多治比広成、聖武天皇、藤原八束、麻田陽春といった人々がそのつど「謹上」の相手に擬せられて来たのだが、いまだ確定を見ないというのが実状のようである。

『万葉集』卷五が山上憶良の手元の資料に基づく所大なるもののあるのは衆目の一致するところであるが、西本願寺本の目録にも、

貧窮問答歌一首并_二短歌

周知のように、「貧窮問答歌」の「左注」と称される「山上憶良頓首謹上」については、その「謹上」の相手が誰であるかをめぐって種々の議論がある。大伴旅人、藤原

とのみあって「山上臣憶良」の五字が冠されていないことを始め、もともと「貧窮問答歌」及びその「左注」には謎が多いものと見受けられる。これについて些か私見を述べ

ようと思うものだが、私は、卷五の中に多く見出せる書簡体という形式に着目することから始めたい（以下、「万葉集」本文の引用は『新日本古典文学大系』に拠る）。

卷五の冒頭の七九三の歌、旅人の「世の中は空しきものと知る時しいよよます悲しかりけり」の前後からが先ず書簡体で、

(1) 大宰帥大伴卿の、凶間に報へし歌一首

禍故重疊し、凶間累集す。永く崩心の悲しげを懐き、独り断腸の泣を流す。但両君の大助に依りて、傾命纔かに継ぐのみ。筆は言を尽くさず。古今に歎く所なり。

七九三の歌

神亀五年六月二十三日

とある。次に、八〇六の歌の前が書簡体で、

(2) 伏して来書を辱くし、具に芳旨を承る。忽ちに隔漢の恋を成し、また抱梁の意を傷ましむ。唯羨は

くは、去留に恙なく、遂に披雲を待たまくのみ。
と見えるが、これは正しくは書簡体の名残りとでも言うべきで、頭語、結語、日付、宛所等は省略されている。

(3) 大伴淡等謹みて状す

梧桐の日本琴一面 対馬の結石山の孫枝なり

この琴、夢に娘子に化りて曰く、「余、根を遙島の崇巒に託け、幹を九陽の休光に晞しき。長に煙霞を帶びて、山川の阿に逍遙し、遠く風波を望みて、雁木の間に出入す。唯百年の後に、空しく溝壑に朽ちなむことを恐れき。偶良匠に遭ひ、削られて小琴と為る。質龜くして音少しきを顧みず、恒に君子の左琴とならむことを希ぶ」といひき。即ち歌ひて曰く、

八一〇の歌

僕、詩を報して詠みて曰く、

八一一の歌

琴の娘子答へて曰く、「敬みて徳音を奉る。幸甚幸甚」といひき。片時に

して覺き、即ち夢の言に感じ、慨然として止默すること得ず。故に公使に附け、聊かに以て進御するの

み。謹状不具

天平元年十月七日、使に附けて進上し、

謹みて中衛高明閣下に通す。謹空

この所、原文では「大伴淡等謹状」とあり、書簡文末尾

の「謹状不具」および「謹通 中衛高明閣下 謹空」と対

応している。先に挙げた(1)・(2)と異なり、書簡の体裁が整つていると見てよいだろう。書簡の送り手、「謹状」、題

詞、歌（この場合、物語化された長い詞書きに取り込まれた形であるが）、「謹状不具」（正確には「謹状」と「不具」に分けられる）、年月日、書簡の渡し手（ないし渡すに当つての方法）、書簡の受け手（および尊称）、「謹通」の上所^{ノミドロ}、「謹空」の脇付^{ワキ}（原文では「謹通」の下、「謹空」の上およそ一字分それぞれ

空く。また「謹空」は、以下を空白にする意の尊敬を表わす脇付である）と、以上の各要素がおおよその書簡の体裁を形づくつていると考へる。（因みに、末尾部分に見られる「進御」「進上」は、訓読みした場合、後出の「謹上」の「上」や「献」と同じく「たてまつ（る）」となることを注記して置く。）

統く藤原房前の旅人への返書。

(4) 跪^{ひざまづ}きて芳音を承り、嘉懽^{ごもん}交深し。乃ち龍門の恩の、

また蓬身の上に厚きことを知り、恋ひ望む殊念は、常心の百倍なり。謹みて白雲の什に和し、以て野鄙の歌を奏す。房前謹みて状す。

八一二の歌

十一月八日、還使の大監に附し、

謹みて尊門の記室に通す。

これも、原文は「房前謹状」と見え、歌、日付、書簡の渡し手、受け手への尊称とその上下に付く「謹通」の上所^{ノミドロ}（「謹状」に対応している）、「記室」の脇付（書記に宛てた形で尊敬の意を示す）より成ると認められる。

(5) 宜啓す。伏して四月六日の賜書を奉り、跪^{ひざまづ}きて封函を開き、拝して芳藻を読む。（中略）孟秋節に膺り、伏して願はくは、万祐の日に新たなるを。今相撲部領使に因りて、謹みて片紙を付す。宜謹みて啓す。不次。

諸人の梅花の歌に和し奉りし一首

八六八の歌

八六四の歌

八六九の歌

松浦の仙媛の歌に和せし一首

八七〇の歌

八六五の歌

八六八の歌

君を思ふこと未だ尽きず、重ねて題せし一首

八六九の歌

八六六の歌

八七〇の歌

天平二年七月十日

憶良の書簡であるが、原文は「憶良誠惶頓首 謹啓」に、漢文の詞書き、歌三首と続き、「天平二年七月十一日」の日付、「筑前国司山上憶良謹上」で締められている。「謹啓」は(5)の宜の書簡文の末尾にも見られたし、それに対応する「謹上」も卷五の中にいくつか見出だすことが出来る。ここは、書簡の冒頭に「誠惶」「頓首」という最上の敬意を表わす二つの語が用いられていることが注目される。また、送り手である自分の名の上に「筑前国司」の官位が記されてあることも確認して置きたい。

(6) 憶良誠惶頓首して謹啓す。
憶良聞くならく、方岳と諸侯と、都督と刺史と、並びに典法に依りて部下を巡行し、その風俗を察る。意内多端にして、口外に出し難し。謹みて三種の鄙歌を以て、五歳の鬱結を写かむと欲。その歌に曰く、

以上、卷五に見える書簡体形式に留意して来たが、ここで、問題の「貧窮問答歌」の前後を少しく長目に引いて、さらにその形式に注目して行くことにする。

三島王の、後に松浦佐用姫の歌に追和せし一首

貧窮問答歌一首 短歌を并せたり

八八三の歌
大伴君熊凝の歌二首 大典麻田陽春の作

八八四の歌
序を并せたり 筑前国守山上憶良

八八五の歌
敬みて熊凝の為にその志を述べし歌に和せし六首

山上憶良頃首謹上す。
好去好来歌一首 反歌二首

八九一の歌（貧窮問答歌）

八九三の歌

反歌

八九五の歌

天平五年三月一日、良の宅に對面し、獻ること

三日なり。山上憶良
謹みて大唐大使卿記室に上る。

以下、「沈痼自哀文 山上憶良作」と統くのであるが、

「貧窮問答歌」の後は原文で「山上憶良頃首謹上」、同じく

「好去好来歌」の後は、

天平五年三月一日、良宅對面、獻三日。山上憶良

八八六の歌

八八七の歌

八八八の歌

八八九の歌

八九〇の歌

八九一の歌

八九二の歌

八九三の歌

八九四の歌

八九五の歌

八九六の歌

八九七の歌

八九八の歌

八九九の歌

八九〇の歌

八九一の歌

謹上 大唐大師卿 記室

となる。武田祐吉氏の『全註釈』に「山上憶良頓首謹上」に関して「貧窮問答歌のみに懸かるか、熊凝の歌にも懸かるか不明である」と見え、澤瀉久孝氏の『注釈』がそれを受けて「前者には筑前国守とあるからこの語は後者のみのものと見るべきであろう」と述べた。

が、果たして「山上憶良頓首謹上」は、「左注」としてその前の「貧窮問答歌」に懸かるものなのだろうか？

八八三の歌、八八四・五の歌、八八六・八九一の歌、それぞれ直前に作者名、題詞を有する。その点、「貧窮問答歌」は題詞のみで作者名を記さない。だが、ごく大まかに、以上どれも題詞とそれに続く歌の組み合わせと見るならば、どうか。「貧窮問答歌」も、八八三以下の歌と同種のかたちを持つものと見えて来はしないだろうか。そして、「好去好來歌」が、「山上憶良頓首謹上」と「謹上 大唐大師卿 記室」とに前後挿まれた一書簡のかたちをもつて見えて来はしないだろうか。この見解は、やがて、「貧窮問答歌」からその作者名としての「山上憶良」をひとたびは外して見ることを要求し、今まで以上に「貧窮問答歌」を『万葉集』（卷五）中で孤立したものと見做した上で

の再検討を促さずには置かないであろう。また、書簡と言つても「好去好來歌」は正にその歌ばかりが献上された風で、先の(3)・(4)・(5)・(6)の書簡には見られた歌の序・前文らしきものが一切無い、ということもあるには有る。しかし、にもかかわらず、ある。私には右のような見解の方が遙かに自然で説得力が有ると思えるのである。

これまで多く「貧窮問答歌」の「左注」と考えられて来た「山上憶良頓首謹上」は、官職を離れた山上憶良が遣唐大使の多治比広成に「好去好來歌」を贈った際の書簡の冒頭部、署名と頭語だつたと考へる。

* * *

二、三補足して置きたい。

卷五には確かに憶良の「左注」が有る。それがどの歌から左注の直前の歌にまで懸かっているものか判然としないものも含めて見ると、七九九の歌の後に、

神龜五年七月二十一日、筑前国守山上憶良上る。

神龜五年七月二十一日、嘉摩郡に於て撰定す。筑前

国守山上憶良

と見え、また、八八二の歌の後に、

天平二年十二月六日、筑前国司山上憶良謹みて上る。

とあり、さらに、(憶良の名を欠くが)九〇三の歌の後に、

天平五年六月丙申の朔の三日戊戌の作。

と見える。そして、これら「左注」が「山上憶良頓首謹上」と決定的に異なるのは、皆、明確な年月日の記されていることである。

ところで、右に記した「山上憶良頓首謹上」を「貧窮問

答歌」の「左注」ではなく、次の「好去好来歌」に懸かる

書簡の冒頭部であろうことに言及していた先達は存在し

た。僧契沖である。『万葉代匠記』精撰本に、

山上憶良頓首謹上 コレハ、次ノ好去好来歌ヲ、遣唐

使ニ贈ラル、書禮ナルヘケレハ、高ク書ヘキカ。但終ニ

ニ、謹上ノ詞アレハ、此ハ貧窮問答歌ヲ人ニ示サル、

時ノ詞次

と記されている。私からすれば、極めて鋭い価値ある指摘

であるが、惜しい哉、契沖においては遂に疑問形に止まつ

た。「頓首」と「謹上」の二語が迷わせたものか、「但終ニ」

以下の文言は些か意味が通りにくい。

これと関連して、伊藤博氏は「貧窮問答歌の成立」(『万葉集の歌人と作品』下巻所収)の「注」に

代匠記以下一部の注書に、貧窮問答歌の「山上憶良頓首謹上」を、次の好去好来歌の冒頭の語としている。

この見かたは当らないと思われるが、ただ、これは、この左注の例外性に着目しての所作であつたと認められる点で注目に値する。

と述べたが、「当らないと思われる」理由は示されていない。

最後に、以上はかつて私が「貧窮問答歌」を調べる機会があつて、虚心に『万葉集』の卷五を繰り返し眺めていて気付いたものであつたことを付言して置く。

(平成十三年十一月一日成稿)